

# 『平家物語評判秘伝抄』

——養生の道——

阿部美知代

〔要旨〕 元和元（二六一五）年、大坂夏の陣が終息し徳川家康が天下平定を成し遂げた。同時に「禁中并公家諸法度」が公布され、諸大名に向けては「元和令」が発布された。三代將軍・家光のとき、「武家諸法度」は十九条に及び、これ以降、將軍によって改定がなされた。

様々な法度の規制のなかで政權を安定させるために為政者が次に目指したものは何であつただろうか。心身の均衡、則ち、心と身体がともに健康でなければ國を統治することはできないと考へるのは自然の流れである。

『平家物語評判秘伝抄』（慶安三（一六五〇）刊、以下『平家評判と略す』の中には『黃帝内經素問』（以下『素問』）、書名をあげていない『啓迪集』（慶安二刊）の一部が多くの紙幅を割いている。自然の摂理が何らかの理由で傷られることにより、臟器に影響し、ひいては心の動きにも変化を来す現象を七情に結びつけ、天下國家を持つ方策に、そして軍略に置き換え、引用されている。

『平家物語』を典拠としながら何故、養生術や医学書の記述を挿入したのか。部分的に出現する養生術や医学書を取り込んだ「評」は『平家物語』とは連関しない（異物）である。その（異物）こそが『平家評判』のなかで説明できな「評」となつて浮上するのである。本論ではその説明できない（異物）について説明を試みることにしたい。但し全編を通して「評」のなかに（異物）が存在しているわけではないことを断つた上で、卷一「禿童」、卷三「許文」、「麩」に出現する異物について検討してみることとする。

〔キーワード〕：医学記事の異物・泰平・疑心欲心・養生・礼

はじめに

曲直瀬玄朔が著した『医学天正記』（慶長十二（一六〇七）刊）には、時の帝、正親町天皇、後陽成天皇をはじめ、信長、秀吉、秀次、秀頼、家康、秀忠など権力者の診療記録が記されている。そしてその診療記録は一般庶民、婢女、下男にまで及んでいる。<sup>①</sup> 貴賤に関わらず病からは遁れられない現実があつた。

『徳川実紀』慶長十八（一六一三）年十一月十五日条に「大御所寸白の御なやみ有て御鷹狩やむ（駿府記）」という記述がある。<sup>②</sup>

徳川家康が寸白のために鷹狩りが中止になつたという記事である。

更に時代を遡つて仁安三（一一六八）年十一月（史実は仁安三年二月『玉葉』）、この寸白によつて命を失いかけた人物がいた。平清盛である（傍

線筆者)。

『平家物語』は清盛の病名に触れることはない。『平家評判』作者(以下、評判作者と略す)は清盛の病を七情の乱れによって生じたと説明している。(疑心欲心)という心のあり方にシフトさせるのである。まずは一つめの異物である「禿童」章段の(評)に表れる養生術をみてみることにする。

### 1、「禿童」——清盛の病——

清盛は病におかされ、命ながらえ生き延びるために五十一歳で出家した。『平家物語』は「其の故にや宿病たちどころに癒えて天命を全うす」と記す。それに対して『平家評判』の(評)は

次のとおりである。

評曰、それ人の命は、元来老少不定のもの也。…(略)…

出家して命ながき物ならば、仏など千万第をもたもち給はざるや。

…(略)…：誠にかほどに寿おしくは、第一に我心を平にして七情を

しづかにし、其氣を養給ひ、第二には食事をつ、しみ給は、い

かなる不死の薬より其益有べし。素問曰、恬澹虚無真氣是に従ひ

精神内に守らば病安。從來らんと云り。譬又病にをかされ、死の

近き事を観じて、後生菩提の為に出家すと云とも、天下の武将たる

身としては、然べからざる事也。…(略)…(三六・ウ〜三七・オ)

醫道には、七情によつて病を生ずと云り。怒時は肝を傷、思時は脾

を傷、恐時は腎を傷、悦時は肺をやぶる。其七情しづかならず、

其思ふ事過る時は、必重病を生じて、其身を苦。一心みたる、時は、

仏法も儒道も人間も畜生も、其身を害する事、たゞ此一也。(二六・ウ〜三八・オ)

上記は『黄帝内経素問』(以下、『素問』と略す)「上古天真論篇」で説く養生術である(図1)。

「上古天真論篇」は「古の人は百歳を越えても起居動作が衰えなかつたというのに、今の世の人は五十歳にもならぬうちに動作が衰えるのはなぜか」と黄帝が岐伯に問いかけをする。

評判作者は養生術を説くにあたり、半百(五十歳)を過ぎた老人のモデルとして清盛を捉え、「恬澹虚無真氣」「精神内に守らば病安。從來らん」「七情」に反するが故に清盛が病に冒された、という病因を導き出す構成をとる。

抑も、清盛はなんの病だったのか。その病状について『玉葉』仁安三年二月九日条に(傍線、訳文筆者、これ以降同)、

自去二日「前大相國惱寸白」云云、一昨頗以減氣、自昨日「又増氣云々、事外六倍

(去る二日より前大相國寸白に悩む云々、一昨以て頗る減氣、昨日より又、氣増す云々、事の外むずかし)

「去る二日から前大相國(清盛)が寸白に悩んでいるとのこと、一昨日はかなり(容態)が悪かった。昨日から更に悪くなり、とても難しい(状態)らしい。」

と『玉葉』は記している。傍線部「寸白」は『医心方』に、

病原論云、寸白者九虫之一虫是也。長一寸而色白形小ナル曰府臟虚弱而能發動…(略)…

(病原論に云う、寸白は九虫の一虫是也。長さ一寸にして色、白く、形は小なる(編)。曰く、府臟虚弱にして能く發動す)

〔病原論に云う。寸白は九虫の内の一虫である。長さは一寸(3.03cm)で色は白、形は小さい。よく動き回って臟腑を虚弱にする。〕

という記載がある。どうやら清盛は食物から寄生虫がお腹の中に入り込んだということになる。五十歳を過ぎた清盛にとって「所惱重」「所勞」(『玉葉』二月十一日条)という文字が示すように体力がかなり奪われたことは推測できる。

ところで『玉葉』に記載がある「減氣」「増氣」の「氣」とは何か。坂出祥仲氏(7)は「氣」について、

中国では古くから今日にいたるまで、医療も養生術もともに共通の生命観ないしは身体感にもとづいている。その第一にあげるべきは、「氣」の觀念であり、「氣」の調和した状態を健康な身体(精神も含めて)と考えている点である。第二には、この「氣」が身体をたえず流れており、循環しており、その回路として「経絡」という觀念とそれにつながって考えられている「経穴」という觀念である。第三には、肺・肝・心・腎・脾の五臓の「氣」とそれをつなげているのが経絡であり、しかも五臓の気の過不足が情動(喜怒哀思悲恐驚)を生ずるとする病因論である。

としている。坂出氏の論を参考に『平家評判』の(評)をつきあわせることのように説明できる。

『平家物語』「禿童」の章段を縦糸に、横糸には清盛をモデルとした人の欲心がもたらす心の不調和が「氣」の循環と七情を乱し、その隙間から病原菌が侵入し、結果として病を患うことになったとする病因論を織り込んだと解することができる。

但し、評判作者が本旨とするところは心(こころ)の作用に重点をおいていることは確かである。評判作者が説く(疑心欲心)についての説明は以下である。

惣じて疑うたがひの心と云ものは、己が身に悪きこと有て、世上に是をかくしをくとおもふが故に、若早知人有りと思ひて、計はからざる疑を生じて、科よがなき者をも害がいする事有べし。古人曰、疑心欲心は大乱の基と云り。我身に悪き事なき時は、縦人是を誹事有とも、更に憚事有べからず。下うたがふを疑うたがふこころの起る事は、皆上の僻ひがあるが故也。

(四一・ウ(四二・オ)

この短文のなかに(疑)の文字の多さに目が引かれる。その直後に「人間の交まじはりにそくばくのあやまち多き物也。ひととして能、此道を極べし」と話しの展開が、「禿童」になぞらえた評判作者の時代の「横目」へとスライドさせる(傍線波線、記号筆者による、これ以降同)。

小人は身の為に疑、君子は人の為に疑。①されば此疑の一ツによつて、人間の交まじはりにそくばくのあやまち多き物也。ひととして能、此道みちを極べし。

惣じて上古の横目の心は、明暮世の為を聞出見出さんと欲す。…(略)

：故に上古の聖人は、天下の目をもつて我目となし、天下の耳をもつて我耳となし、統に我身を糺さんとほつす。愚将は我身を糺さずして下を糺さんとす。他人の非をのみ糺して、自心の非を糺ざる時は、吾非弥あやまちと成べし。…(略) …

君子、他人の非を見ては、我非を改給ふと見えたり。②聖徳太子憲法の第十曰。怒を断、怒をすて、人の違を怒され。人みな心有心各ことなる有。…(略) …③是非の理はたれかはよく是を分ち定んと云り。故に④末代に至て、天下國家を持給はん人、此一事に心をめぐらし給へ。⑤若世に事を巧者有時には、必此横目と云に先大事有者也。良将は様、の策をめぐらし、彼横目に是を聞しめて、其横目の耳と目をくります時は、その君の耳目を暗事安し。故に忠臣賢臣の間を妨、又科なき人を害せしめて 禍の便となすもの也。

(四二オ・四五・オ)

〔心の内にある〕怒りを絶ち、(表面にあらわれる)怒りをすて、人と考え方の相違に怒つてはならない。人にはみな心(考え方)というものがあり、考え方はそれぞれ異なる。相手が道理を言えば、自分には別の道理がある。自分に道理があるときは相手に別の道理がある。自分は必ずしも聖人ではないし、すべての人が愚人というわけでもない。人は皆、同じように凡夫人なのだ。是がよい、悪いは誰が定められるのだろうか。故に末代に至って天下國家を存続なさろうとする人はよくお考えなさい。

もし、世の中に謀叛を企む者があるときには、必ず横目(の存在)が大事である。良将は(横目の利用方法)を様々な策をもつて考え、敵の忠臣賢臣の偽りの裏切り情報を横目に流す。(横目の君主は)

偽りの情報に疑心を抱き、忠臣賢臣を無実の罪で殺害してしまう、(そうなると)臣下は君主に不信を抱く、結果として、敵は勢力を失い、味方は勞せずして攻略することができる。」

傍線部①「人間の交」とは何か。人間の文字の上に「上下」を加えれば、上下の交わり則ち上下の(礼)である。前半部を要約すると、心が狭い人はわが身にとつての不利益だけを考える、君子は人民の利益になることを考えて疑う(自らの言動、行動が正しいか心に問い直す)ものだ。君子と下の間には必ず(礼)があり、(職分に)大きな差がある、君子が人民のために採用する横目は善である、という位置付けである。

江戸前期において、横目は抑もどのように捉えられていたのだろうか。『本佐録』(著者未詳、江戸前期か)に、

国々へ横目を遣し、天下乱たる時謀反すべき者か、忠をすべき者か、此振を種々にあいしらい、又手をまわして、尋知ること肝要なり。国主の国を預る事は、天子の天道より天下を預りたると同じ。是又万民安穩にして、天下の為に忠を思ふべし。其国の治りたるを知るは、先百姓の有付能、家居能し、次に國王驕らずして、公儀を恐れ、臣下は二心なく、国主に忠を思ひ、国中の人民、子は親に孝を尽し、夫婦・兄弟和合して、邪成政なくば、国主正しくして、下万民治たるとしるべし。…(略) …

と記している。評判作者がいうように「我身に悪き事なき時は、縦人はを誹事有とも、更に憚事有べからず」であるはずだが、大名家にとつて横目は相当の脅威であったはずである。

柚田善雄氏は三代將軍・家光は外様大名を遠隔地に転封し、改易・滅封を行い、幕府権力の絶対優位を確立した人物としている。表面上は泰平の世を迎えているかに見えても、寛永・正保時代は相次ぐ飢饉に農民は悩まされていた。更に大名の改易は大量の浪人が生じて社会不安をも招いていた<sup>(9)</sup>。

その社会不安は『平家評判』が刊行された翌年、慶安四年に未遂に終わった由井正雪による慶安の変が如実に物語っている。改易に果たした横目の役割は大きかったに違いない。

また、『大名廃絶録<sup>(10)</sup>』によれば、家光の時代に最も改易が多かったことも事実である。

他方、庶民目線から見た横目について『翁問答』<sup>(11)</sup>は、

體充曰、よこめといふ者、今時<sup>いまとき</sup>のはやり物にて候。無くて叶<sup>かな</sup>わぬ者にて候や。

師翁曰、よく治りたる代<sup>よ</sup>には、さのみ要らざるものなり。風俗あしく人の心みだれたる代には有るがよく候。その子細は、よこめあれば人毎に法度を恐れ戒むる心ありて、治道のたすけとなりぬべし。然れども、よこめのいふ事を聞入れてむざとせはしなく有らば無きに劣るべし。よこめは下々の心を戒むる道具なりと得心して、むざとよこめのいふ事を承引すべからず。物じて君たる人は、大悪逆の外は、何事を聞かぬふり知らぬふりにて大様なるを本とす。利根だてにてはいくしきは、國を失ふ基と知るべし。

と中江藤樹（一六〇八～一六四八）は記しており、横目は大名家だけでなく、庶民に対しても監視の目を光らせていたことが『翁問答』からも

見てとれる。

こうした背景のもと、『平家評判』「禿童」譚の養生術の意味するところは、人々の（内なるころろ）の管理にあつたのではないかと考える。

『平家評判』引用部分②以降の君子を將軍に、下を大名もしくは臣下に置き換えてみるとどうだろうか。聖徳太子憲法第十は大名が抱く（七情）（喜怒哀思悲恐驚）への教誡と解するならば、波線部③「是非の理はたれかはよく是を分ち定んと云り」の部分は、是非の理とは法度を定めた將軍のみが行使できるといふ逆説のメッセージと考えることが可能になる。これは誰に向けてのメッセージか。傍線部④「故に末代に至て、天下國家を持給はん人」則ち、大名である。

それに接続する⑤「若世に事を巧者有時には」は大名に向けての警告である。横目からもたらされる偽りの情報によって敵国の君主の疑心を刺激し、内部崩壊に導く方法は、『孫子』「計篇」のなかの「兵は詭道也」に相当する。

林羅山が著した『孫子諺解』は日本における『孫子』注釈書として最も古いものである<sup>(12)</sup>。羅山の詭道についての注釈は、

兵ハ詭道也トハ敵ヲハカラサレハ勝カタシ。兵ニタ、シキ道あり、イツハリノ道アリ。敵ニ兼テ案内ヲイヒテムカフサマニマツスクニウチカツハ正シキ道ナリ。其分ニテカチカタ キユヘニ計ヲナス。  
「始計第一」

としており、傍線部のように、非常手段としての偽りの道を正当化している。

傍線部⑤「若世に事を巧者有時には」の話しに戻ると、大名に少して

も謀反の疑いがある場合は、諭え正しくない道であつても軍事力を用いるまでもなく、偽りの情報によつて壊滅してしまふ、という極めて強権的な警告なのである。

因みに『三略諺解』(寛永三(一六二六)成)の「聖主ノ用レ兵非レ樂レ之也」の項に、

聖主ノ兵ヲ用ルコトハ、コレヲコノミタノシムニアラス。無道暴逆ノモノヲ誅シ、乱ヲウツテオサメントスルカタメナリ。義兵ヲ以テ不義ヲ誅ス。江河ノ大水ヲ流シカケテ、ワツカナル火ヲケスカ如ク不測ノ谷ニソミテ、オチントスルモノヲオシオトスカ如シ。深シテソコモシレヌヲ不測ト云也。タ、カヒテカツコト必定ナルノタトヘナリ。シカレトモ優游恬澹シテス、マサルコトハ、人ヲヤフランコトヲ、オモンスルユヘナリ。カル／＼シクフタメカス。心モ氣モ、シツカニキヨク正クスルヲ大将ノ根本トスル故也。(下略)

と記し、大義名分のもと、早い段階で乱の芽を摘むことの大事、そして大将の根本とすることは清廉潔白であれ、という注釈をつけている。

「禿童」譚の養生術にはじまる清盛の(疑心欲心)に対する過剰なまでの描写は、いつしか評判作者の同時代の「横目」にスライドさせてしまふ、その手法は「横目」の正当性と「疑」の文字の頻出、それは明らかに評判作者と同時代の危機感覚に響き合うものがあるといえる。

「禿童」譚冒頭に表れる養生術を⑤以降の大名への警告文の後ろに位置を組み直せば、その養生術の意味がみえてくる。則ち、

寿おしくは、第一に我心を平にして七情をしづかにし、其氣を養

給ひ、第二には良事をつしめ給は、いかなる不死の薬より其益有べし。素問曰、恬澹虚無真氣是に從ひ精神内に守らば、

(三二六・ウ)

と示すように、長生きをしたければ、恬澹虚無(無欲)であることを勧めているのである。『三略諺解』の「聖主ノ用レ兵非レ樂レ之也」の記述を幕府の大義名分と捉えたとき、傍線部⑤以降は(詭道)ではなく、「正シキ道」に変化するのである。

「禿童」の(評)は、清盛をモデルとした非道を題材として、改易、牢人、飢饉など評判作者と同時代の危機意識と響き合うものがある。みせかけの泰平とは裏腹の歪みの中に潜む人々の(疑心欲心)への警鐘・教訓と(こころ)を管理する養生術を異物として評判作者は表出させたと考える。清盛の非道は単なる題材であり、『平家物語』として機能しているわけではない。

## 2、「許文」——徳子の懷妊——

治承二(一一七八)年正月七日、「彗星東方にいづ。蚩尤氣とも申す。又赤氣とも申す。十八日光をます」と不吉の予兆を『平家物語』は記す。そして『平家評判』は中宮徳子の懷妊に伴い、変成男子の法を行うことへの批判をする。その(評)は『素問』を基本とした男(図2の1)女(図2の2)の肉体の成長過程をほぼ全文を載せている。

評曰、それ人の懷妊をなす事、天理を省てなす事あたふべからず。

先女子は七歳にして、腎氣さかんになり、齒かはり、髪のは、十四歳にして天の陰精に水氣を受、任脉通じて、太衝の脈盛になり、月

水始て下る。故に是より始て子を胎事有。二十一にして、腎氣等平になる。故に齒牙生じてながし。二十八歳にして筋骨かたく、髪ながくのび極て、身體盛になる。三十五歳にして陽明の脉衰、面はじめてかれ、髪もぬけそむる。四十二歳にして。三陽の脉上にておとろへ、面みなかれて、顔の色うるほひ少し。髪初て白くなる。四十九歳にして、任脉大きにおとろへ太衝の脈少く、天の陰精盡て地の精通せず。故に形かれて是よりして子なし。男子は八歳にして、腎氣實し髪のかみはる。十六歳にして腎氣盛になり、天の陰精をうけ、精氣あふれ、陰陽和合す。故によく子を生ず。二十四歳にして腎氣等平に筋かたまりて力強。故に牙生じて長し。三十二歳にして筋骨盛に成、肌肉満々て。うるほひ有。四十歳にして腎氣衰、髪ぬけ齒かれそむる。四十八歳にして陽氣上におとろへ面かみひげ半白五十六歳にして肝氣おとろへ、筋自由にはたらかず、天の陰精盡て精弱。腎氣おとろへ、形皆極る。六十四歳にして齒かみぬけて老す。腎は水を司、五臟六腑の精をうけて是を蔵す。故に五臟盛にして能寫し通ずべし。六十四歳にしては五臟皆おとろへ筋骨よはく、天の陰精盡て、かみひげ白くなり、身體重くして行歩心のま、ならず。故に男子はこのとしより子なし。是即天地の道理也。此理をもつてみる時は、人間の懐妊皆氣血調り、陰陽天地和合して、五臟平なる時は、自然と子を胞べし。然るに其故なくして是を神仏に祈といふとも、いかんぞ天地の道理を省て子を生ずべけんや。然にこの貴僧達胎内の子の女子を男子に祈出すと云事、更に心得がたし。…(略)… (六・ウ〜八・ウ)

以上は「人が年をとつてから子どもができないのは、生殖力が尽きた

のか、あるいは自然のきまりでそうなるのか」という黄帝の問いにたいして岐伯が答える「生氣通天論篇」である。

『素問』を基本とした医学書『啓迪集』では女子の成長過程の記述は「婦人門」に該当する。『平家評判』はなぜ、全文をのせる必要があったのか。変成男子の法を行うことの無意味を説明するとしても、その一部分を引用すれば済むはずである。この長文の記事の直後の文は、

仏説に變成男子と云事あれども、是は、胎内の子を祈て女子を男子になすにはあらず。譬愚鈍の女人なれども、仏心を悟得る時は、忽に男子の智にも勝が故に變じて男子となすと云事也。八歳の龍女が成仏を遂たりと云も、即この心也。仏の所説は、無量の方便多し。故にかりに此名を顯して、何の道にも仏行を執行せ、末世濁乱の時にも、此法を退轉ならしめんが為也。 (八・ウ〜九・オ)

と記しており、胎内にいる子に變成男子の法を祈ることはない、八歳の女子が變成男子をとげたのは生まれた後に仏心を悟つたからである、仏説は量り知れないほど多くの方便がある、末世に到つて其の時々の都合にあわせて方便を変化させていった、という趣旨であり、變成男子の法を行った貴僧への批判に終始している。その末文は「故に如来の眞法内證を悟て、無償の重寶をもとめ給へ」で締めくくられており、男女の肉体の成長過程とは何ら接続していない異物であると言わざるを得ない。ただ、その異物をどう機能させるかという点、「或人問曰」で始まる問答形式の因果応報譚にあるといえる。

生れてより以来終に魚鳥を食せざらんものあらんに、不慮に是を食

そめてよりこのかた、又其味を好思ふがごとし。…(略)…一切の因果は唯人の心につきしたがひ、五體にそみつきて、彼梅実の縁を待がごとし。(十一・オウウ)

(生まれてからこの方、正しく生きてきたが、たまたま利欲のうま味を知ってしまった。それからというものの利欲のうまみが忘れられなくなってしまうようなものだ。一切の因果はただ人の心のままに従って五體に染みついてしまう、あの梅の花が結実するように悪事がくつきりと表に現れるようなものだ。)

それ因果の攻来る事其道一にあらず。其は必弱めを便とす。この中宮の御惱争入道の苦とならざるべけんや。これより弥にうだうの苦に落沈べき事あるべし。

(因果があらわれるということはストレートに本人にくるとは限らない。其は必ず本人の弱点とするところに襲ってくる。この中宮の病は親の清盛にとつては、どんなに苦しいものとなるだろうか。清盛の苦しみは底知れぬほどのものになるに違いない。)

「許文」冒頭の「生氣通天論篇」を人間の一生のリズムと考えた時、悪事を働かず、正直に生きれば無事に人生を全うできるという養生術につながる。右に示した梅の実の因果、親の因果が子にたたるという清盛と徳子の因果応報は、そのリズムを乱した例として説明することができ。悪事を働かず、正直に生きれば平穩に一生を全うできたという教誡を導引するための「生氣通天論篇」であり、人間の一生のリズムを全文

で示す必要があったのである。異物を冒頭に配置した意味がそこに見いだせる。

### 3、「魘」

『平家物語』は治承二年五月(『玉葉』は治承四(一一八〇)年四月)、「彼地の獄の業風なりとも、これには過ぎじとぞみえし」というほどの魘が吹き、天下争乱の予兆が語られる。その記述はわずか八行のみである。

他方、『平家評判』「魘」の章段冒頭は、神祇官の「天下の大事、仏法王法共にかたふき、并に兵乱相つづき候べし」という御占に反応を示し、その「評」は『素問』「金匱真言論篇第四」を展開させる。

評曰、人道正しからざる時は、寒暑時ならず、風雨万物を害すと云り。実やこの時世の政を見に、上下悉礼法をみだり、とこやみの世とも謂つべき時なれば、かゝる災出来ぬ事、理なきにしもあらず。されば古聖人の御代には、五日一雨、十日一風とて十日に一度風おこり万物をすゞしめ働し、五日に一度雨降、萬物を漣うるをして、生長せしむ。是皆其政の正しくして、人道の節たがはざる故に天地の節、自正し。それ風の人をなやます事は、八方の風悉、其利害あらずと云事なし。然ども人に是をうくる所は、たゞ五風をもつて其法とす。五風は四時の風也。東方の風は春に生。故に其病肝の臓に有。南方の風は夏に生。故に其病心の臓に有。西方の風は秋に生。故に其病肺臓に有。北方の風は冬に生。故に其病腎臓にあり。中央は土なれば、其病必脾臓に有。然ども人七情みだらずして行道正しき時は氣血順流するが故に、世に風起といふ



とも、是を煩事なし五臟 自 虚弱にして、氣血不順なるが故に、外邪其たよりを得て必 風煩をなすべし。…(略) …故に天下の風雨時ならずして、世上のわずらひと成事 是亦人主たるべき人の政 よこしまなるが故也。…(略) …故に聖人の御代にも天下に大風大雨旱魃の有ける事有。然ども是は正て、天地の氣運の盈虚の時也。…(略) …この故に人々其道をつゝしみ給へ。橋極ときは必くるしみ来るべし。安にのみ居る時ハ必危 事生ずべし。故に楽有楽ハ浮雲のごとし。

(二八七・ウ) (二九丁・オ)

『平家評判』は『素問』「金匱真言論篇第四」(図3)を取り混ぜながら自然界の変異が、人の心にも作用し、その結果、〈魘〉が起こり天下争乱を招いたと評している。わずか十行にも満たない『平家物語』本文の章段にこれほどの医学情報は何を意味するのか。

漢字ひらがなが読めさえすれば、日常あるいは四季の循環作用の知識として『素問』を学んだことになる。

しかし、その後文は「心のままにすることなかれ」と〈礼〉へと接続する構成をとるのである。

かなりの長文になるので所々抜粋しながらみてみることにする。

① 孝経曰、上に居 おこらずんば高けれども危からず。満れどもあふれざるは、長く富をたもつ所也と云り。 (二九・オ)

② 然に其時の世を勘へみるに、高き人、弥高くしており、満ざるものも皆分に過て驕を長ずる時なれば、是終にはみだれざるべし

んや。 (二九・オ) (二九・ウ)

③ しかれば是を制せんが為に恩を厚し、位を高くし、武家をつかはさる。この故に武家 弥 威光を高くして富、又其功を賞ぜられては、或は大 臣 閔 白等の官位に経上る世となれり。 (三十・オ)

④ 然ば世の主たる君は、礼道を知給はずして叶がたし。上に居て傲ざるも是礼にあらずや。礼は天理の節文と云て、天下夏なる時は人も夏のごとくに其身をもつべし。天下冬なる時は人も冬のごとくにその身をもつべし。まして夜はよるのごとく、晝はひるのごとくすべし。しかるに末世の人、夜は終夜居酒食遊覧を事とし、ひるは日中過れども臥て起す。…(略) …(三十・ウ) (三二・オ)

⑤ されば其家にてをのれ一人心よきを行じて、あまたのもの、苦みを長ず。故に古人曰、驕もの久しからず。勇もの先亡と云り。…(略) …(三二・ウ)

まだまだ〈評〉は続くのであるが、ここであげられた種々の〈礼〉は① 慎みと節度の礼② 君臣の礼③ 礼賞④ 服装の礼と養生に関わる日常生活の乱れ⑤ 礼楽を基としたものである。

「良將は其往をもつて来を知、かくれたるを以あらはするを知」(三二・ウ)と評判作者は述べている。典拠は『礼記』である。

大上貴<sup>レ</sup>徳、其次務<sup>レ</sup>「施報」、禮尚<sup>レ</sup>「往來」。往而不<sup>レ</sup>來、非<sup>レ</sup>禮也。來而不<sup>レ</sup>往、亦非<sup>レ</sup>禮也。人有<sup>レ</sup>禮則安、無<sup>レ</sup>禮則危。

「大上は徳を貫び、其の次は施報を務む。禮は往來を尚ぶ。往きて來らざるは、禮に非ざるなり。來りて往かざるも、亦禮に非ざるなり。人禮有れば則ち安く、禮無ければ則ち危し。」

(最上の交際方法は互いに徳をもつて交わり、礼も挨拶も必要としない方法である。そして一方から施すと他方から報いるという方法は、次善のものである。即ち礼がそれであつて、礼には往と来(施と報)が必要である。こちらから往つたのに、あちらから来ないとか、あちらから来たのに、こちらから往かないとかでは、礼にならないのである。)

「良将」は評判作者の同時代に比すれば大名である。

〈礼〉は相手があつて成立する。その意味においては「金匱真言論篇第四」傍線部の五風のメカニズムと共通するといえるのではないか。五風則ち季節風によって人体の臓器が影響を受ける、傷れた臓器はやがて七情に変化を来す。その変化を季節ごとに、人ほどのように受け入れて和らげるか、そして乗り切り、穏やかに長生きをするか、というのが養生術である。

他方、〈礼〉は人と人との関係である。そこに〈こころ〉が生じる。相手を敬い、七情を平かに保ち、自らの分を弁え、民の心を和らげること、礼を守れば人生を穏やかに過ごすことができる。つまり、〈礼〉と異物に見えた「金匱真言論篇第四」の養生術はセットでなくてはならない。健康な心身をもつていなければ〈礼〉によって天下を統治することができないということにつながるのである。

## おわりに

巻一「禿童」、巻三「許文」「臆」における養生術と医学記事に焦点をあてた。三者に通じることは冒頭部分に『素問』を配置する手法である。その後に『平家物語』の本文に沿った形で〈評〉を展開させる。そして気がつかないうちに、評判作者の同時代へとスライドさせる。いわば、『平家物語』の隙間に侵入をしたということになるのか。

元和期を経て寛永期に幕藩体制はほぼ完成した。評判作者の時代は一応は泰平の世である。武器をもつて戦う時代は既に過ぎ去った。かわりに大名が戦わなければならなくなったのは権力の獲得と家の存続である。將軍の代替わりごとに換わる権力者に如何に接近し、取り立ててもらうか、大名家は細心の注意を払わなければならなかった。<sup>(16)</sup>

そこには当然のこととして欲心が芽生える。権力者の間近に伺候していたであろう評判作者は、そうした光景を目のあたりにしていたと推測する。

「禿童」は評判作者と同時代の君臣の〈礼〉に対する危機意識のもとで構想されたと考へる。

「許文」の因果応報譚も家の存続という点で「禿童」に響き合うものがある。君臣の〈礼〉が破られたときにおこる家の断絶と因果応報は不健康な人の心と結びつく。

そして「臆」は、国を統治する者の根本〈礼〉を章段後半部分に全面に押し出す構成をとった。

「禿童」、「許文」「臆」の底流にあるものは君臣の〈礼〉であり、異物にみえた『素問』の記述は、〈礼〉を支える人の心と身体の調和を目指す養生術として二つ揃って初めて機能したといえる。

図1「黄帝内经素問註証発微」「上古天真論第一」  
(古活字版。梅寿刊行医書。梅寿は慶長後半から寛永年間まで明刊本の医書の翻印を行い、約三十種を出版している。本書は「素問」の注釈書で、明の万曆十四年(一五八六)宝命堂刊本を底本として翻印したもの(国立国会図書館蔵デジタルコレクション解題より)。

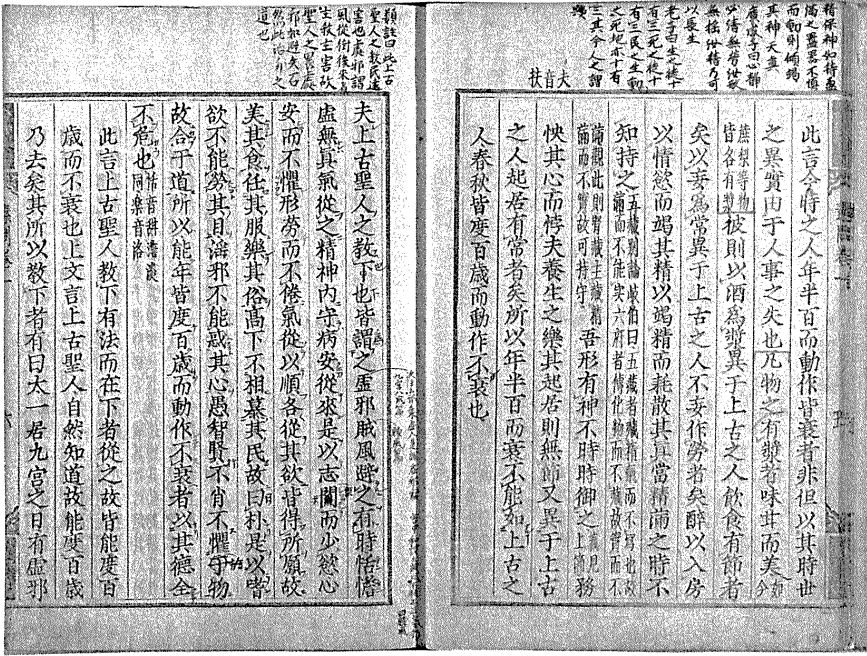


図2の1「上古天真論第一」

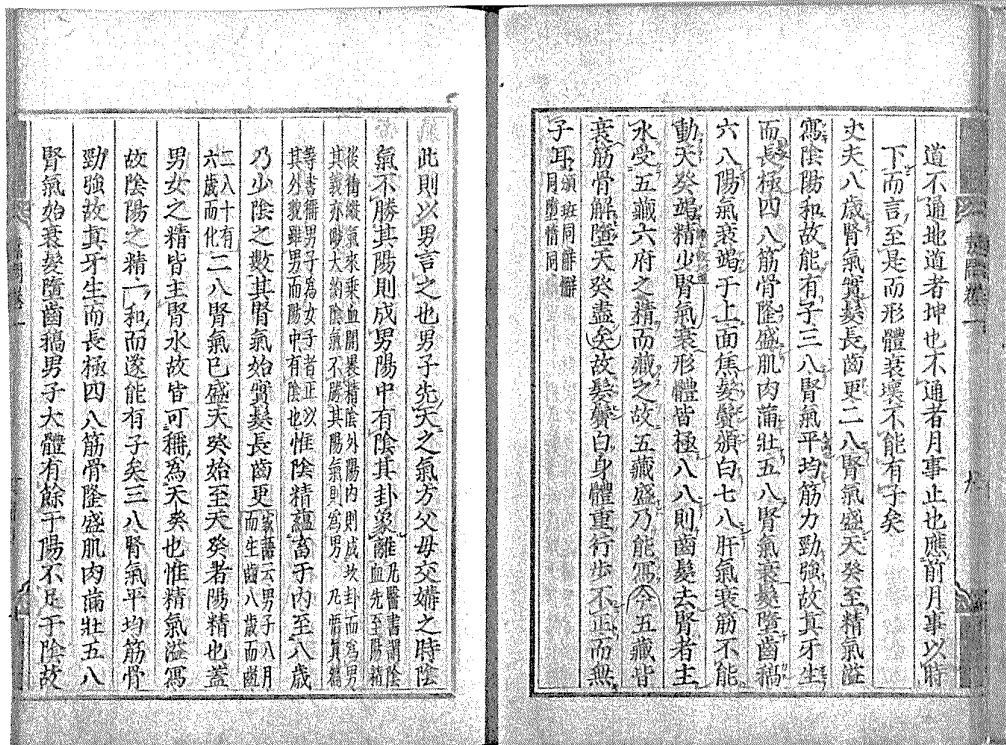


図2の2「上古天真論第一」

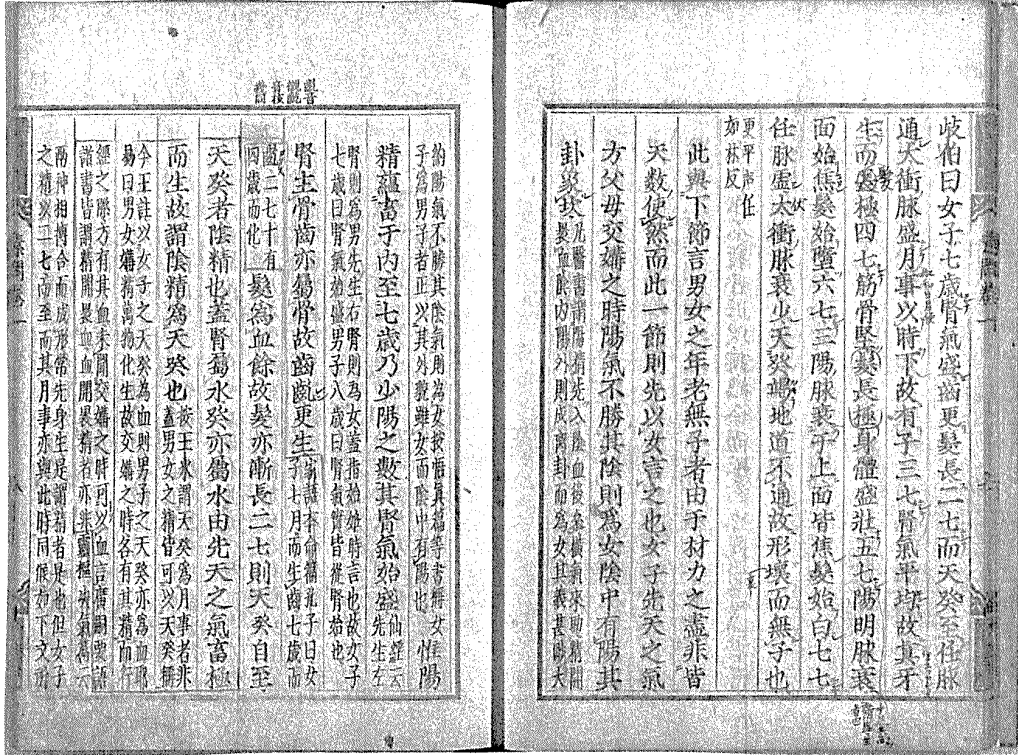
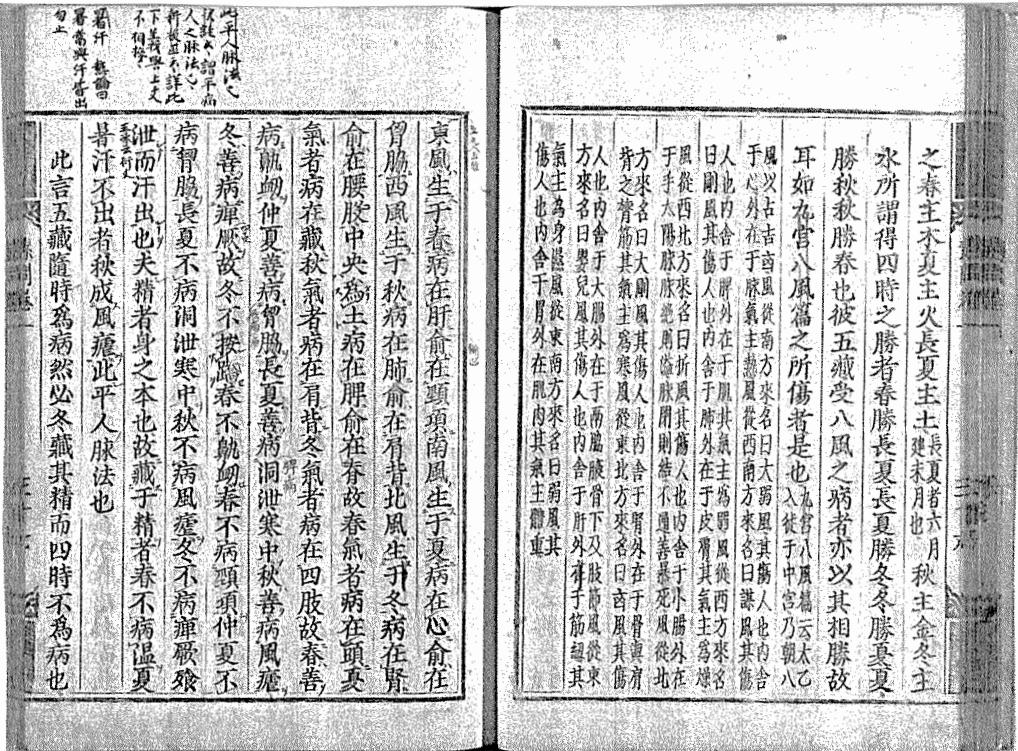


図3「金匱真言論第四」



注

- (1) 『漢方医学書集成 6 曲直瀬玄朔』(名著出版、一九七九・七)、二一〜二三頁。
- (2) 『徳川実紀』(経済雑誌社、一九〇四〜一九〇七)、国立国会図書館デジタルコレクション第一編卷廿四、コマ番号三二四。
- (3) 『平家物語評判秘伝鈔』は『日本古典文学大事典』(明治書院)によれば『平家物語』流布本の本文を引く(注:松尾葦江氏)という記述から、野村宗朔校註『昭和校訂 平家物語(完)』(武蔵野書院、一九四八・十)を参考とした。八頁。
- (4) 『東洋医学の原典 黄帝内经素問訳注』(医道の日本社、二〇〇九・一)。
- (5) 『玉葉 第一』(名著刊行会、一九九三・九)、四〇頁。
- (6) 『医心方 第七』(内閣文庫蔵、写本)コマ番号35を参照。
- (7) 坂出祥伸『道教と養生思想』(ベリかん社、一九九二・二)、八頁。
- (8) 『日本思想大系 藤原惺窩 林羅山』(岩波書店、一九七五・九)所収『本佐録』解説に著者は初期幕政の実体に相当通じた人物であろうと推測している。
- (9) 柿田善雄『日本近世の歴史 2 将軍権力の確立』(吉川弘文館、二〇一三・一)。
- (10) 南条範夫『大名廢絶録』(人物往来社、一九六四)。
- (11) 『中江藤樹文集』(有朋堂書店、一九二六)所収『翁問答』卷之二、六三頁。
- (12) 『新釈漢文大系 孫子 呉子』(明治書院、一九七二・一)、解説二〇頁。
- (13) 『孫子 諺解』(内閣文庫蔵、デジタルアーカイブによる)。コマ番号29。
- (14) 『三略 諺解』(内閣文庫蔵、デジタルアーカイブによる)。コマ番号68。
- (15) 『新釈漢文大系 礼記 上』(明治書院、一九七二・四)十五〜十六頁。引用。
- (16) 山本博文『江戸時代の国家・法・社会』(校倉書房、二〇〇四・八)四四〜六〇頁。

(日本文学専攻博士課程後期三年)

Heike Monogatari Hyoban Hidencho: The Curing Way

ABE Michiyo

[Abstract] In 1615, the Summer Campaign in Osaka was ended and Tokugawa Ieyasu achieved subjugation of the entire land. At the same time, the "Kinchu narabi ni kuge sho hatto" (Regulations for the Imperial Court and Court Nobility) were promulgated while the "Genna rei" (Regulations of the Genna Era, also known as the "Buke sho hatto" or Regulations for the Warrior Houses) were issued for the feudal lords, who were of the warrior class. During the rule of the third Shogun, Iemitsu, the Regulations for the Warrior Houses grew to 19 articles, and these subsequently underwent revisions by various of the Shogun at different times.

What, then, did government rulers take on as their next aim in order to stabilize a regime that was under the control of these various laws? The answer was a balance of mind and body. That is, it was natural for them to think that they would not be able to govern the nation unless they were healthy in both mind and body alike.

A large part of the content of the *Heike Monogatari Hyoban Hidencho* [Secret Teachings on Criticism and Judgment of the Tale of the Heike; hereafter *Heike Hyoban*], published in 1650, was taken up by portions of the *Kotei daikei somon* [Plain Questions on the Inner Classic of Huangdi; in Chinese, Huang di nei jing su wen] and, though its title is not named, the *Keiteki-shu* [Textbook of Internal Medicine],

published in 1649. The conceptual approach in these works is that when natural law is disrupted for some reason, the bodily organs are influenced, and by extension the functions of heart and mind are affected. These phenomena are linked to the "seven emotions" (shichijō), which are identified with policies and measures for maintaining the state, and further with military tactics, and which are referred to in connection with them.

The question is why passages on healing techniques and medicine were inserted into a work that takes the *Heike Monogatari* [Tale of the Heike], a classic of warrior narrative, as the source of its subject matter. These portions of text on healing techniques and medicine appear here and there in the "criticism" on the *Heike Monogatari* as foreign matter that is unrelated to that tale. That foreign matter emerges in the midst of the *Heike Hyōban* as "criticism" that cannot be explained by that critical work itself. This article attempts to explicate that inexplicable foreign matter. It should be noted, however, that this foreign matter is not to be found in the "criticism" throughout the entire book. The examination will take up the foreign matter that appears in the "Kamuro" (Boy Spies) episode in Volume 1 and the "Yurushibumi" (Letters of Forgiveness) and "Tsumujikaze" (Whirlwind) episodes in Volume 3.

[Keywords]